心學先哲叢集

宗

JC心学先哲叢集_001.indd 1-2 2010/06/22 9:03:08

心學先哲叢集

安政七庚申

閏三月吉日

和歌廻門蔵

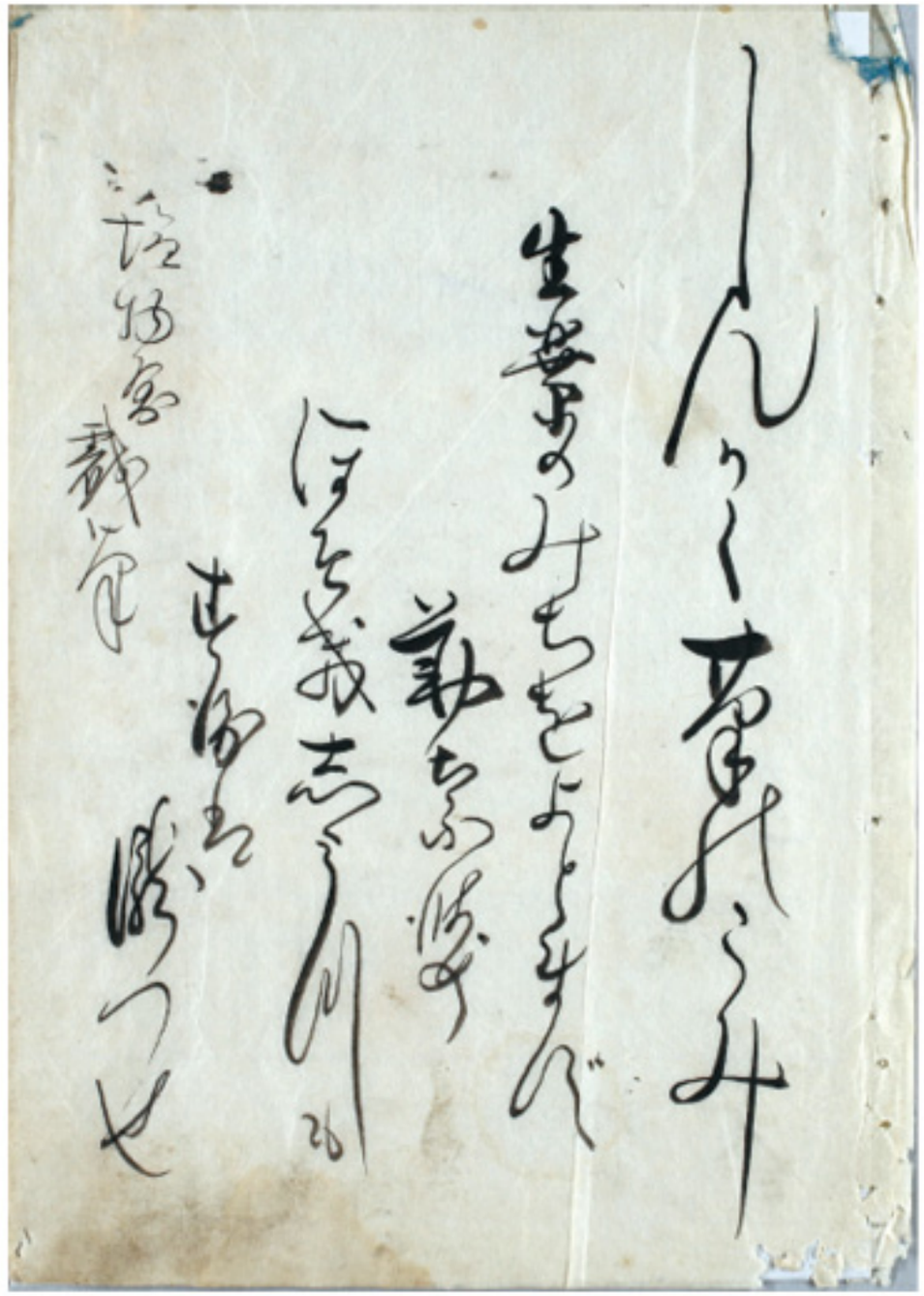
心学先哲叢集

安政七庚申

閏三月吉日

和歌廻門蔵

JC心学先哲叢集_001.indd 3-4 2010/04/22 9:03:20



しんがく筆のうみ

生業の　みちをよどまず

勤なば

ほそきしみづも

すゑは

滝つせ

塩物屋

戯筆

心学筆の海

生業の道をたゆむことなく勤めれば、細い清水も、末には勢いよく流れる川となるものだ。

塩物屋戯筆

JiG-中央研究書事_001.indd 5-6 2010/04/22 9:03:22

人をうまく　のせれば

われは　かづかるゝ

太郎兵衛駕（たろべえかご）の

欲の世の中

ことたれば（*）　たるに

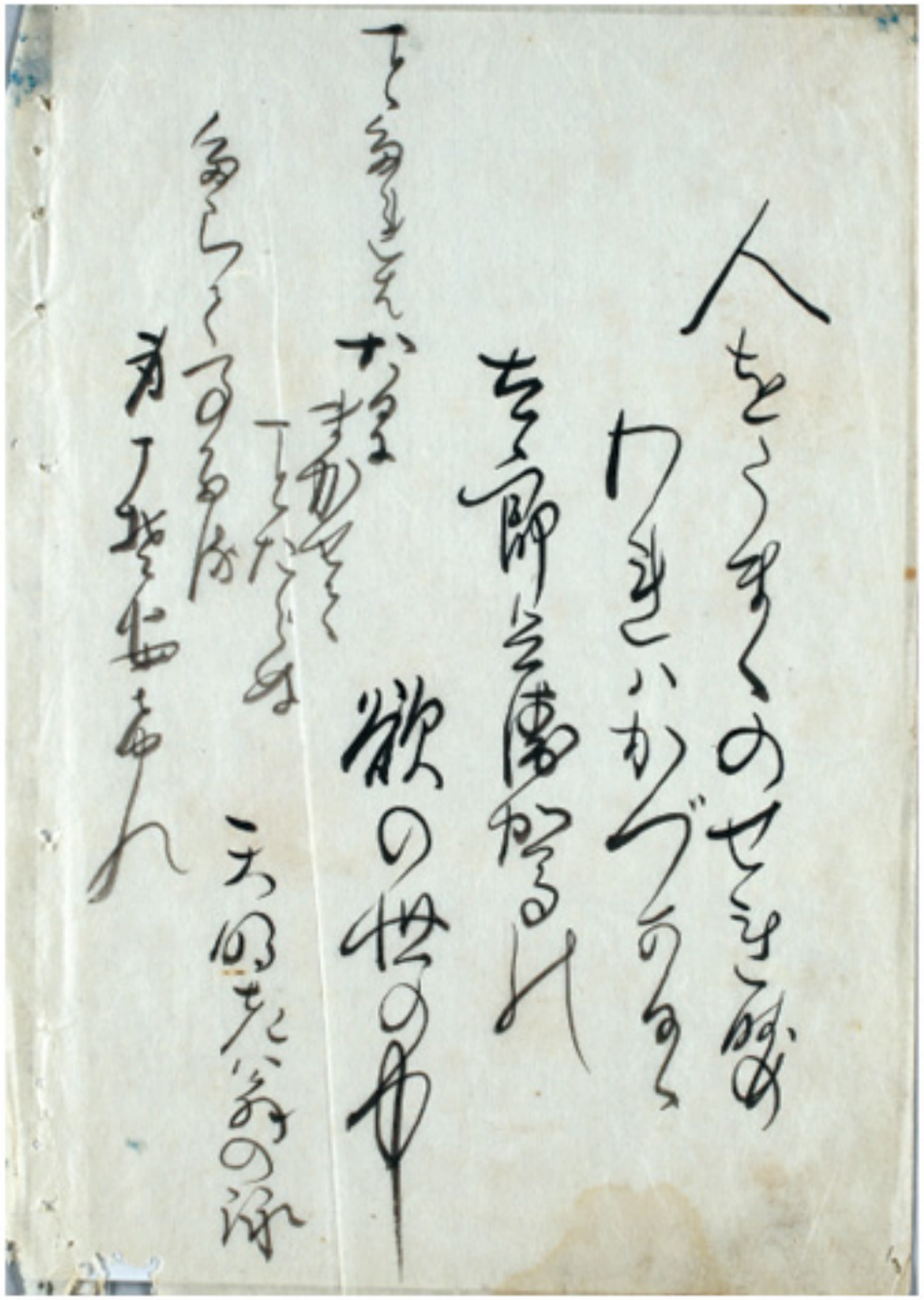
まかせで

ことたらぬ

たらで事たる

身こそ安けれ

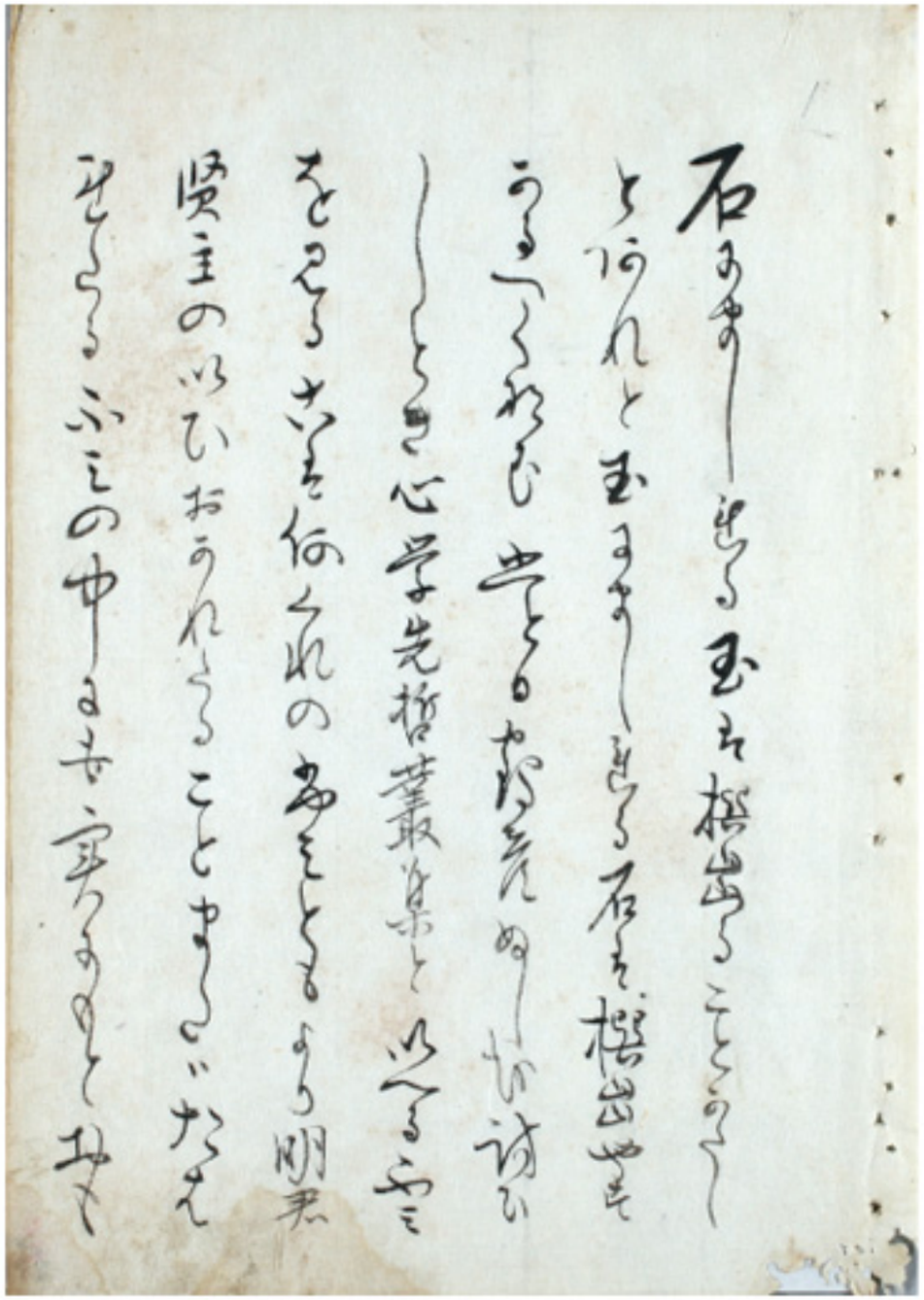
天明老翁の詠



人をうまく乗せれば自分は担がれるもので、結局差し引き同じなのが欲の世の中というものだ。
満ち足りていると満ち足るにしたがって不満足なものである。不十分でありながら満ち足りている身こそが安らかなのだ。

天明老翁の詠

JO-中央印刷原稿_001.indd　7-8　2010/04/22　9:03:24



石にまじれる玉は　撰出ることかたし

とあれど　玉にまじれる石は　撰出やす

かるべくなむ　ひと日　鵜彦ぬしを訪ひ

しとき　心学先哲叢集といへるふみ

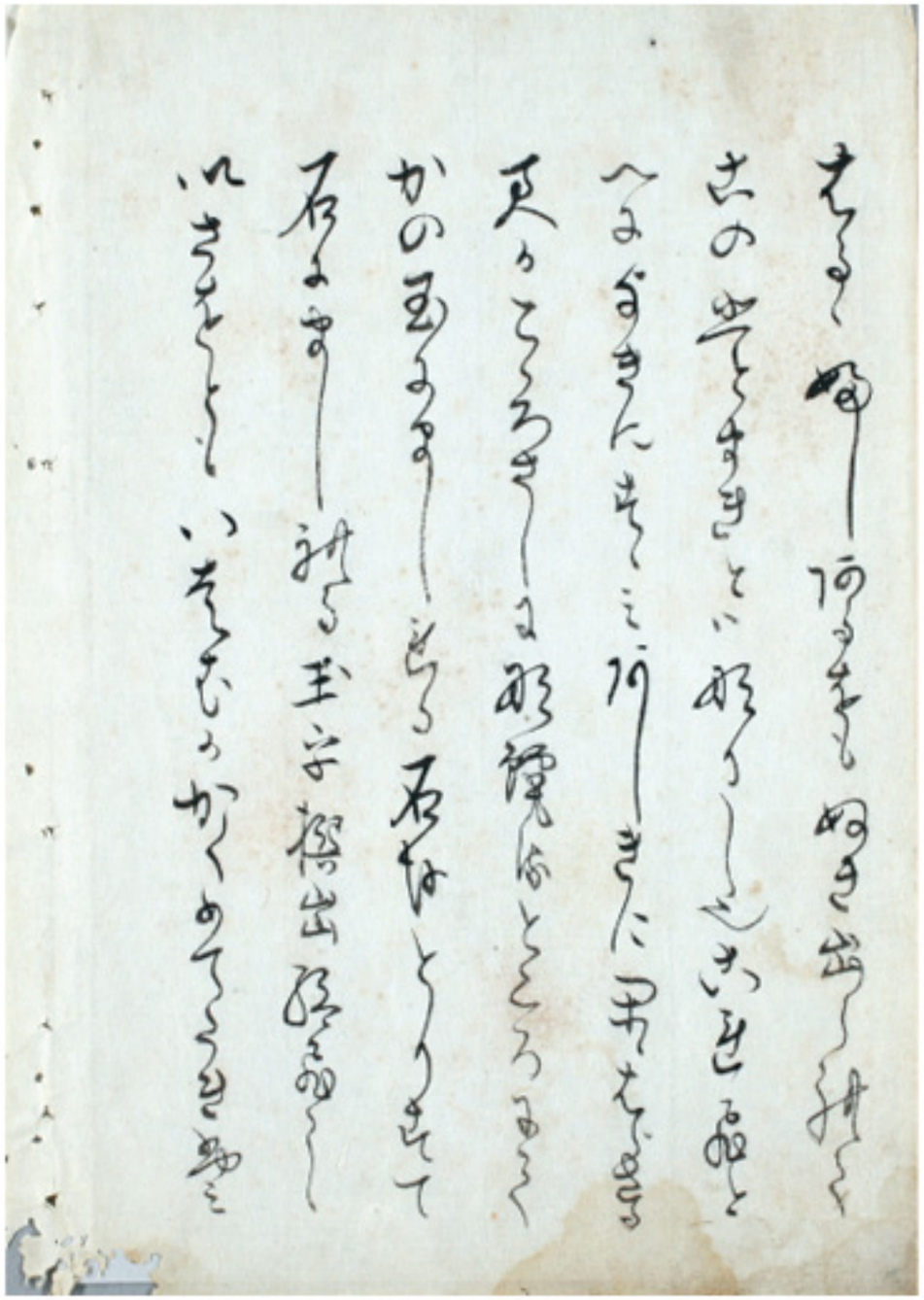
を見る　こは　何くれのふみどもより　明君

賢主のいひおかれたること　または　たは

れたるふみの中にも　実にもとおも

石に混じっている玉は選び出すことが難しいというが、玉に混じった石は選び出しやすいもののようである。先日、鵜彦氏を訪問した時、『心学先哲叢集』という本を見た。これは、さまざまな書物の中から明君賢主の言い残しあそばしたこと、または戯れの書物の中にもなるほどと思える

心学先哲叢集_001.indd　9-10　2010/06/22　9:03:27



はるゝふしあるをも　ぬき出られて

このひとまきとはなりし也　これひと

へに　よきにすゝみ　あしきにかゝはらざる

君がこゝろざしになれるところにて

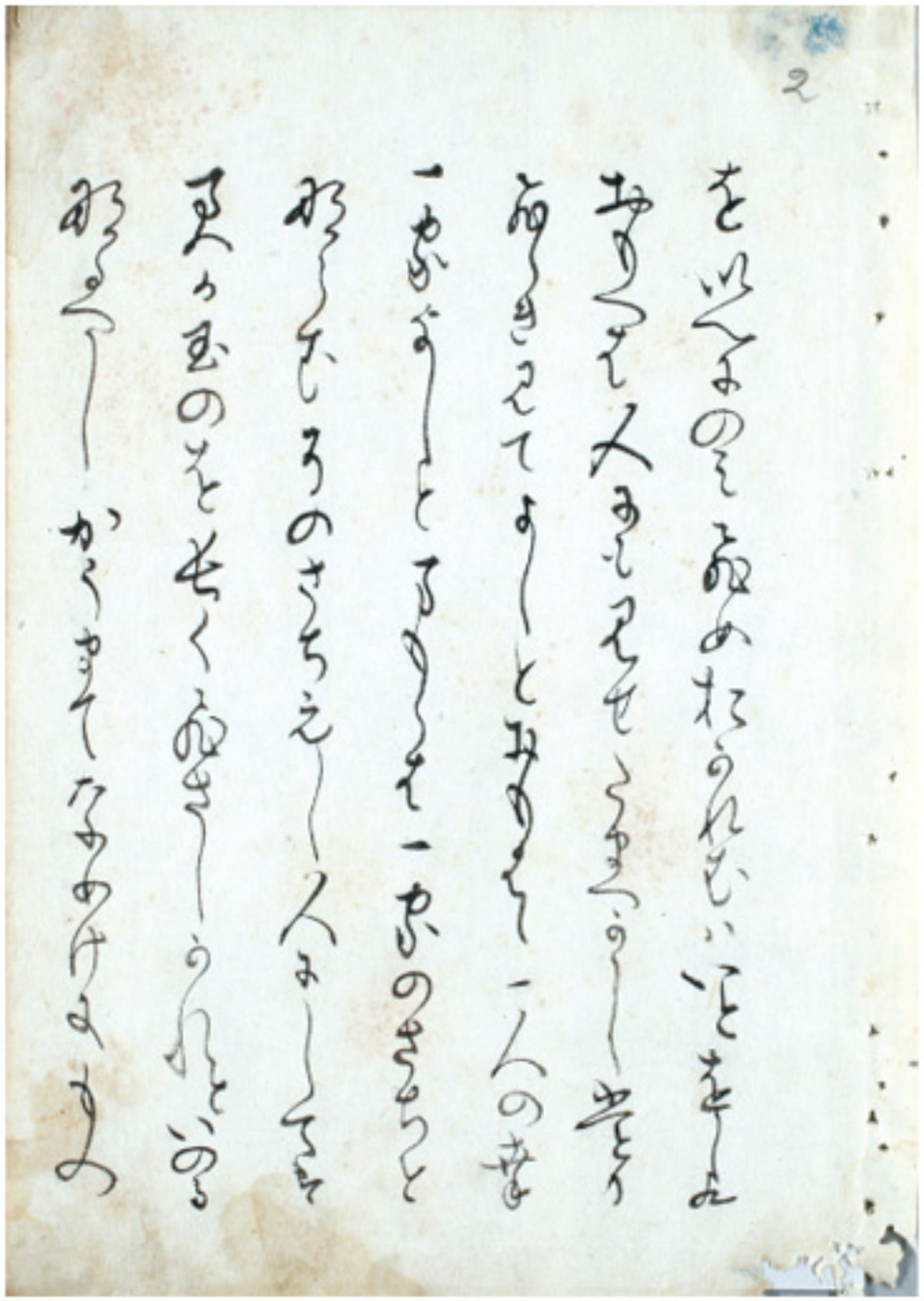
かの玉にまじれる石をとりすて

石にまじれる玉を選出給ひし

いさをともいはむか　かくめでたきふみ

ふしのある部分を書き抜かれて、この一冊となったのである。これはひとえに、良いことに進み、悪いことに関わらない君の志によって出来上がったところであって、その玉に混じった石を捨て、石に混じった玉を選び出しなさった勲功とも言おうか。このような素晴らしい本

JO学先哲叢集_001.indd　11-12　2010/04/22　9:03:30



を　いへにのみひめおかれむは　いとをしく
おもへば　人にも見せたまへかし　ひとり
ひらき見て　よしとおもはゞ　一人の幸
一家よしとまもらば　一家のさちと
ならむ　そのさちえし人にしては
君が玉*のを長くひさしかれといのる
なるべし　かうまで*なめげにもの

を自分の家にだけ秘め置いておかれるのはたいへんもったいなく思うので、他の人にもお見せなさい。一人が読んでよいと思えば一人の幸せ、一家でよいと思って尊重すれば一家の幸せとなるだろう。その幸いを得た人は、君の寿命が長く久しくあってほしいと祈るであろう。こうまでしつこく

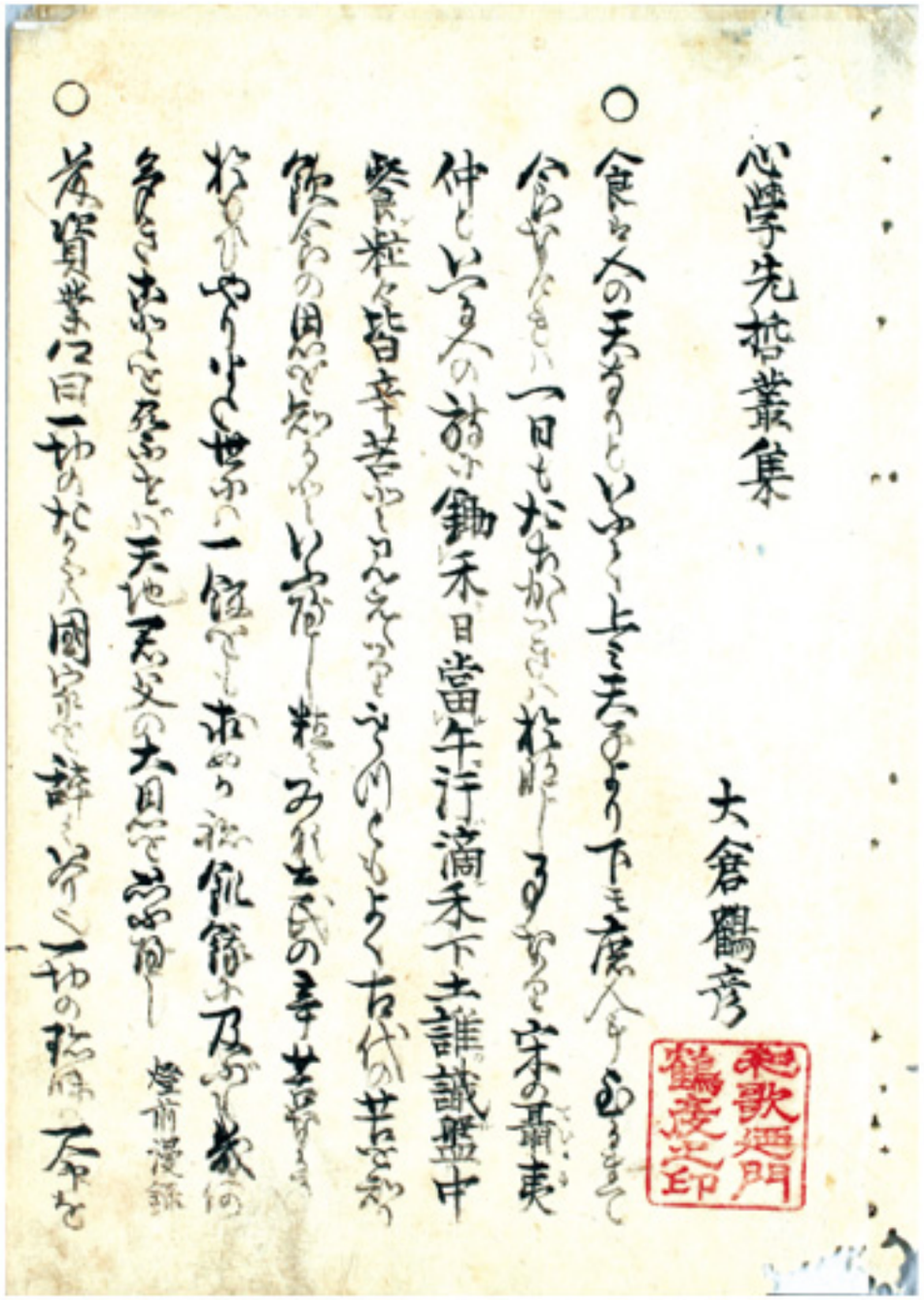
JiO-学先初叢書_001.indd　13-14　2010/04/22　9:03:32

言いたいことはいろいろあるけれど
いたきわざなめれど　そは　へだてぬ
中と見ゆるしたまへかし
安政七とせといふとし　春の末つかた
静雅堂春樹記

いひならべすむは　いと〳〵かたはら
いたきわざなめれど　そは　へだてぬ
中と見ゆるしたまへかし
安政七とせといふとし　春の末つかた
静雅堂春樹記

言い続けるのは、ひどくみっともない行いであろうけれど、そこは遠慮のない間柄と思ってお見逃し下さい。
安政七年という年の春の末の頃
静雅堂春樹記す

JO伊先哲叢書_001.indd　15-16　2010/06/22　9:03:35



心学先哲叢集　大倉鶴彦

○食は人の天なりといふて　上み天子より下も庶人に至るまで

食なければ一日もたちがたきはおなじ事なり　宋の蘇夾

仲といへる人の詩に鋤禾日当午　汗滴禾下土　誰識盤中

餐　粒々皆辛苦と見えたり　もつともよく古代の苦を知り

飲食の恩を知るといふべし　粒々みな土民の辛苦なる事

おもひやり　また世には一飯をも求めかね　飢餓に及ぶも幾何

多きことを察せば　天地君父の大恩を思ふべし　〈燈前漫録〉

○藤資業卿曰　一切のたからは国家を砕く斧也　一切の珍味は一命を

心学先哲叢集　大倉鶴彦　和歌廻門鶴彦之印

○食は人の天なりといふて　上み天子より下も庶人に至るまで

食なければ一日もたちがたきはおなじ事なり　宋の蘇夾

仲といへる人の詩に鋤禾日当午　汗滴禾下土　誰識盤中

餐　粒々皆辛苦と見えたり　もつともよく古代の苦を知り

飲食の恩を知るといふべし　粒々みな土民の辛苦なる事

おもひやり　また世には一飯をも求めかね　飢餓に及ぶも幾何

多きことを察せば　天地君父の大恩を思ふべし　〈燈前漫録〉

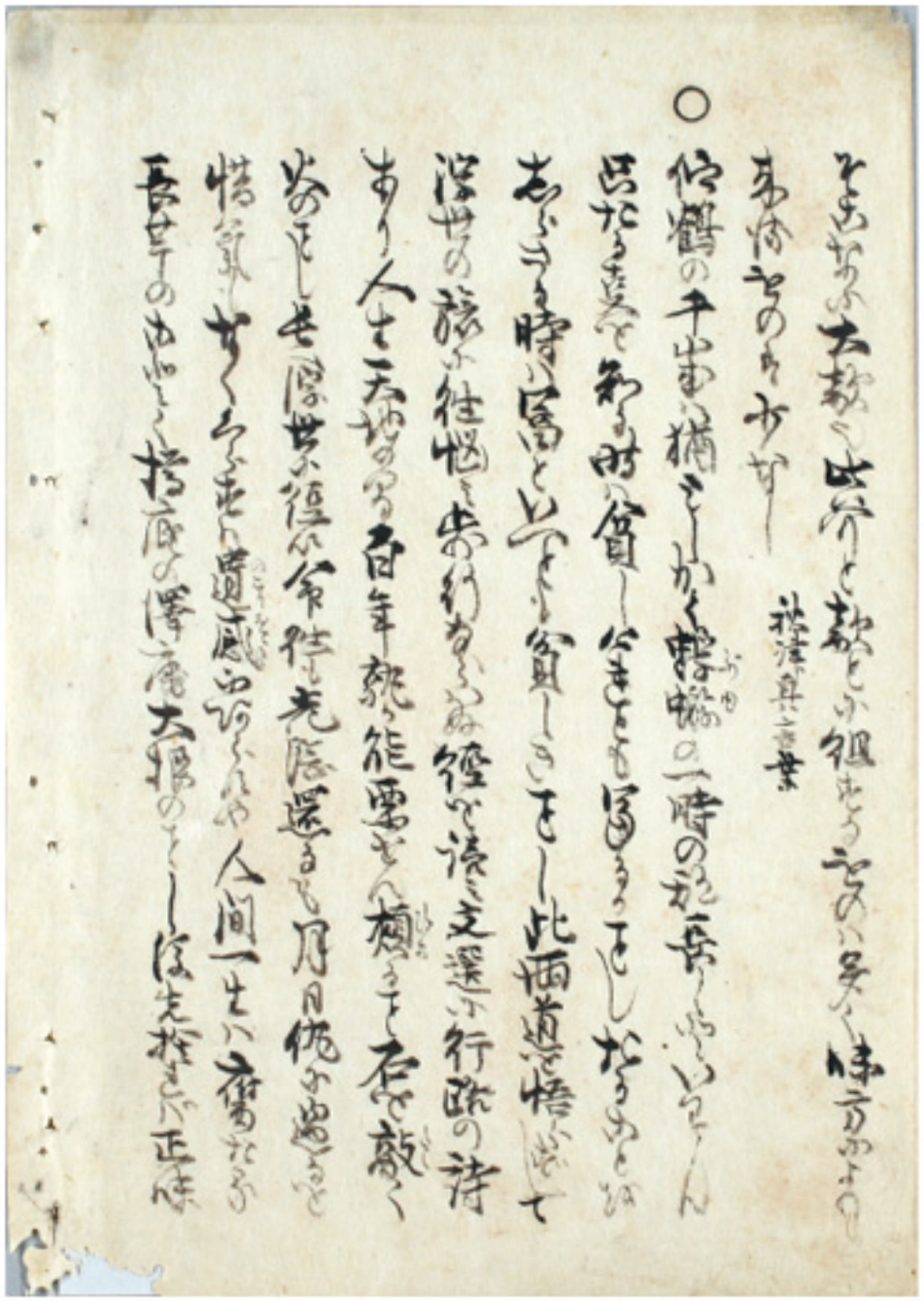
○藤資業卿曰　一切のたからは国家を砕く斧也　一切の珍味は一命を

心学先哲叢集　大倉鶴彦　和歌廻門鶴彦之印

○食は人間にとっての天であると言って、上は天子から下は庶民に至るまで、食がなければ一日も生きていくことができないのは誰も同じ事である。宋の蘇夾仲という人の詩に、「禾を鋤いて、日、午に当たる。汗は滴る、禾下の土。誰か知る、盤中の餐。粒粒皆、辛苦なるを。（朝から田畑を耕していると、いつしか太陽は南の空に高くのぼっている。汗が滴り落ちて、作物の下の土に染み込んでゆく。誰が知るだろうか、食器の中のご馳走が一粒一粒すべて農民の辛苦の結晶であるということを。）」と見えている。もっともよく古代の農民の苦労を知り、飲食の恩を知る言葉と言えるだろう。穀物の一粒一粒はみな農民の辛苦の結晶であることに思いを馳せ、また世の中には一食の飯さえ手に入れかねて飢餓に至る者もどれほど多いことかを推察すれば、天地君父の大恩の有り難さを思わねばならない。

○藤原資業卿の曰く、あらゆる宝は国家を砕く斧である。あらゆる珍味は一命を

JC心学先哲叢集_001.indd 17-18 2010/04/22 9:03:37



そこなふ大敵也　此斧と敵とに組するものは多く　味方により

来るものは少なし　〈秋津真言集〉

○杵鶴の千歳は猶みじかく　蜉蝣の一時の期長しといわん

只たる事を知る時は　貧しけれども富るがごとし

たることをしらざる時は　富といへども貧しきごとし　此両道を悟らずして

浮世の旅に往悩み歩行　ならはぬ経を読み　『文選』に行路の詩

あり　人生天地の間　百年孰か能要せん　頽ること石を敲く

火のごとし　長へ浮世に短い命　往も光陰　還るも月日　仇に過るを

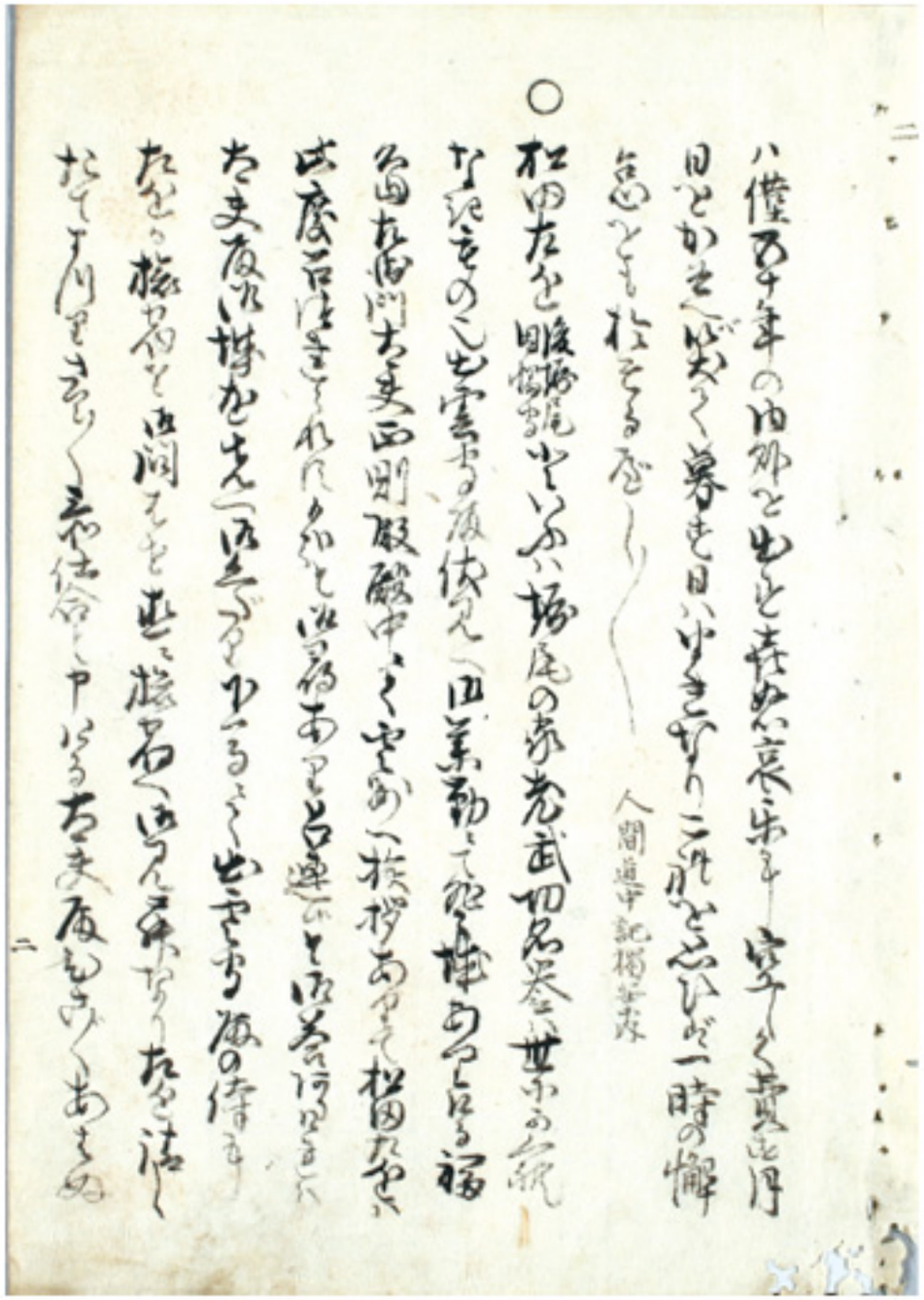
惜気もなくくらすは　遺憾にあらずや　人間一生は腐たる

長芋のごとく　樽底の沢庵大根のごとし　後先捨れば正味

害する大敵である。この斧と敵とに一味するものは多く、味方に集まり来るものは少ない。

○鶴の千年の寿命はなお短く、蜉蝣の一時の生命は長いと言おう。ただ満足する事を知っている時は、貧しくても富んでいるようなものだ。満足することを知らない時は、富んでいても貧しいようなものだ。この二つの道を悟らずにいて、浮世の旅を歩みながら悩み暮らし、習いもせぬ経を読み、『文選』に行路の詩がある。「人は天地の間に生きて、百年をどうしてよく要するだろうか。その光は、石を敲く火花のようなものだ」長い浮世に短い命、往く時も還る時も月日は光陰のように過ぎてゆく。その月日が無駄に過ぎるのを惜しいとも思わず暮らすのは、残念なことではないだろうか。人間の一生は、腐った長芋か、あるいは樽底の沢庵のようなものだ。始めと終わりを切り捨ててみれば、正味

JC学先哲叢書_001.indd 19-20 2013/04/22 9:03:39



は薩五十年の内外を出ず　喜怒哀楽に空しく費す月
日をかぞへば　笑て暮す日はまれなり　これを思ひば　一時の懈
怠をもおそるべし〳〵　〈人間道中記独案内〉

○松田左近（後の福尾因幡守）といふは　堀尾の家老　武功名誉は世にかくれなきもの也　出雲守殿　伏見へ御参勤にて登城ありける　福島左衛門太夫正則殿　殿中にて雲州へ挨拶ありて　松田左近は此度召つれられず候哉と御尋あり　召連候と御答ありければ太夫殿　御城を先へ御くだり　下馬にて出雲守殿の侍に左近が旅宿を御問はせ　直に旅宿へ御見舞なり　左近請じたてまつり　さて〳〵　忝　仕合と申ける　太夫殿　ひさ〳〵あはぬ

わずか五十年前後である。喜怒哀楽に振り回されて虚しく費やす月日を数えてみると、笑って暮らす日は稀である。これを思えば、ほんの一時の怠け心も恐れるべきである、恐れるべきである。

○松田左近（後の福尾因幡守）というのは堀尾家の家老で、武功名誉は世に隠れなき人物である。出雲守殿が伏見へ御参勤で登城なさることがあった。福島正則殿から御殿の内で出雲守へ挨拶があり、「松田左近は今回お連れにならないのでございますか」とお尋ねがある。「召し連れております」とお答えがあったので、福島殿はお城を先にご退出になり、下馬先で出雲守殿の家臣に左近の旅宿を尋ねさせなさり、すぐに旅宿へご挨拶がある。左近はこれを招き入れ申し上げて、「さてこれは忝ない有り難いことです」と申しあげた。福島殿は「長らく会わないので

JG学先哲叢書_001.indd 21-22 2012/04/22 9:03:42

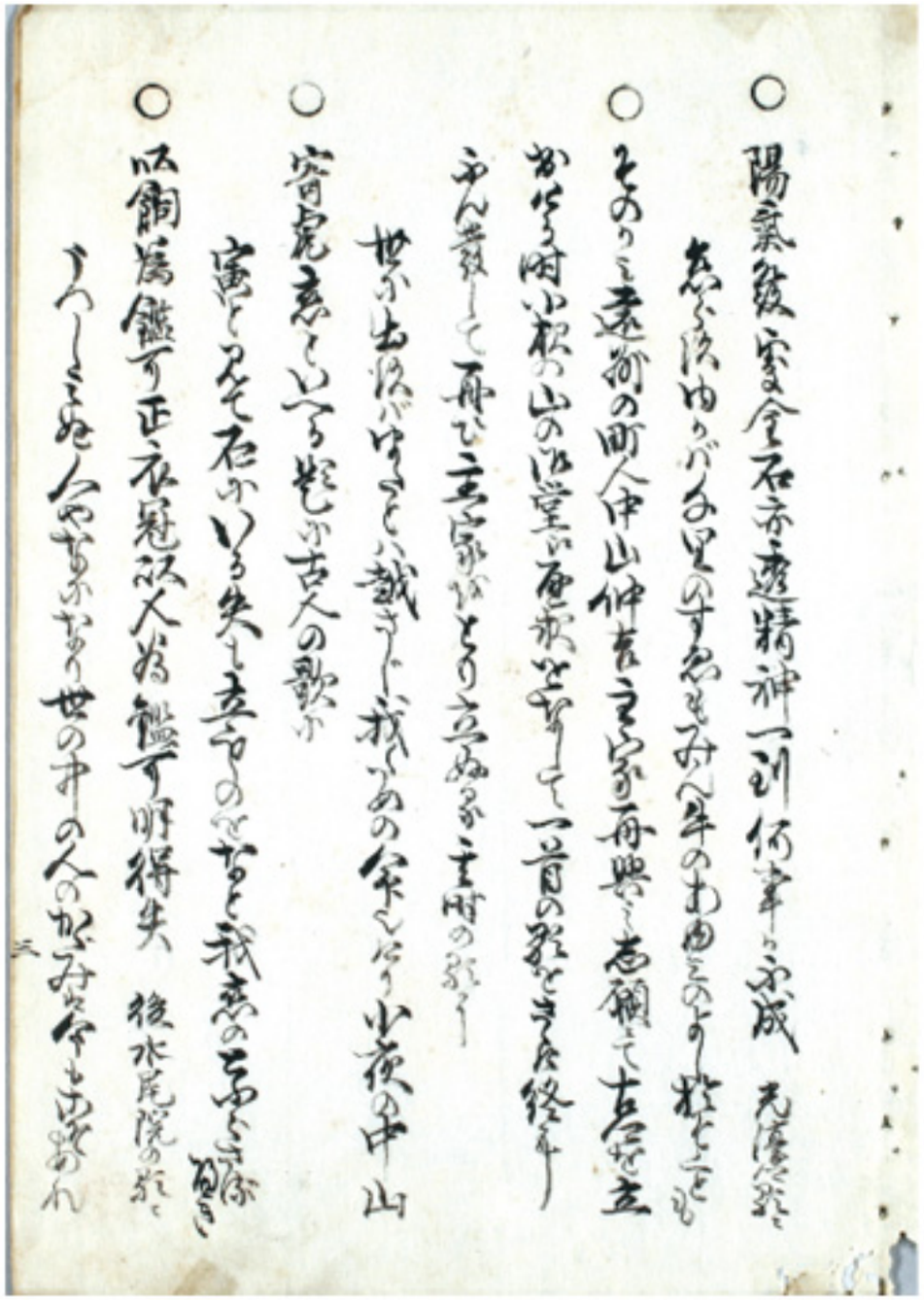
故なつかしく存る処へ　供に参られしと聞ける故に　直に
参りたりと御申にて　緩々と御物がたり有けるに　左近　なに
がな御馳走申上度存れども　上べき物も無御座候　御酒
ひとつ上げ申んとて　小性を呼寄　腰より銭をいだし　御前
へ一杯　我等一杯　また御前へ一杯と　さかづきの往来をかぞへて
酒買に申付るを　太夫殿　扇をひらき御つかひ候が　あふぎ
にて左近が手を御おさへ　某も多くは給べぬ　二つ給べぬれば
よき程也　おほく買ひ候はひらに無用なりと御られしと
なり　（寧固齋談叢）　千藪

○天が下　静けかる世に　あえる身は　さらに深山の　奥ももとめず

会いたいと思っていたところへ、出雲守の供として参られたと聞いたので、直ぐに参上したのだ」と仰って、ゆるゆるとお話なさっていたが、左近は「何かご馳走を差し上げたく思いますけれども、差し上げるべきものがございません。御酒をひとつ差し上げましょう」と言って、小姓を呼び寄せ、腰の銭入れから銭を出し、「御前へ一杯、私に一杯、また御前へ一杯……」と杯の往来の数を数えて、酒を買いに行くよう申し付けると、福島殿は扇をひらいてお使いになられていたが、その扇で左近の手を抑えられ、「自分も多くは飲まない。二杯飲めばちょうどよいぐらいである。多く買うのはどうかおやめください」と仰られたということだ。

○この天下において平穏な世にめぐりあえた自分は、全く深山の奥に隠遁することを望んだりはしないのだ。　千藪

JC中先哲叢書_001.indd　23-24　2010/04/22　9:03:45



○陽気発処金石亦透　精神一到何事か不成　光淳卿歌に

怠らず　ゆかば千里の　すえもみん　牛のあゆみの　よしおそくとも

○そのかみ遠州の町人中山仲吉　主家再興の志願にて　古郷を立出ける時　小夜の山の御堂え通夜をなして　一首の歌をさゝげ　終にふん発して　再び主家をとり立ぬる　其時の歌に

世に出ずば　またとは越さじ　我ための　命也けり　小夜の中山

○「寄虎恋」といへる題に古人の歌に

寅と見て　石にいる矢も　立ものを　など我恋の　とふらざるべき

○以銅為鑑可正衣冠　以人為鑑可明得失　後水尾院の歌に

うつしみぬ　人やなになり　世の中の　人のかゞみは　今もこそあれ

○「陽気発する処、金石また透る。精神一到して何事か成らざらん。」　光淳卿の歌に

怠ることなく行けば千里の末をも見よう。牛の歩みがたとえ遅々としていても。

○その昔、遠州の町人中山仲吉が主家再興の志あって、故郷を立ち出る時に、小夜の中山の御堂に参籠して終夜祈願し、一首の歌を奉納し、ついには奮起して主家を再興することができた。その時の奉納した歌に、

世に出られなければ、この小夜の中山の峠をまた二度とは越すことはないだろう。我がための命があってのことであるよ。

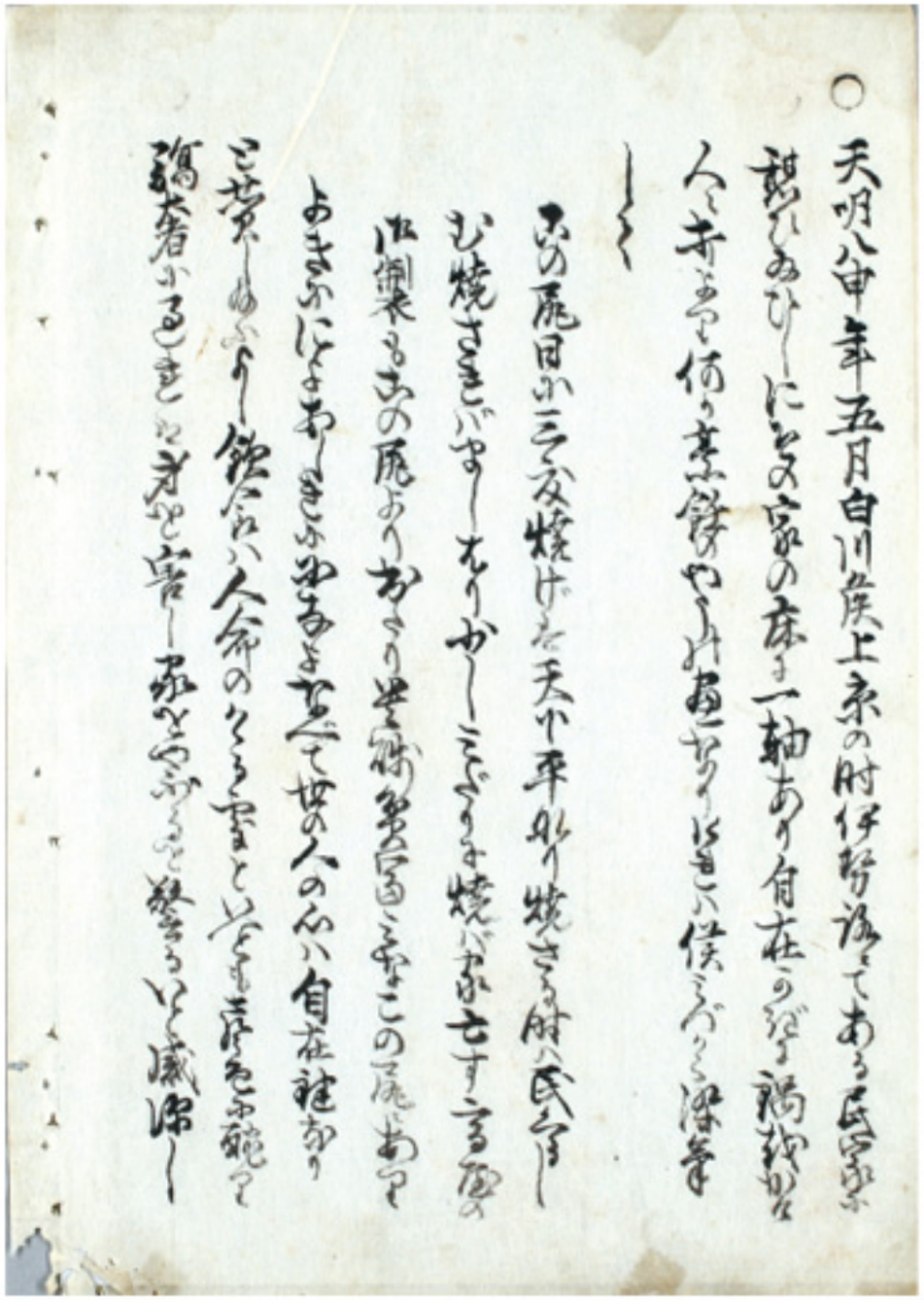
○「虎に寄する恋」という題で、昔の人の歌に、

虎と見誤って石に射た矢も石に立ったのに、どうして私の恋心はあの人に通じないのだろうか。

○「銅を以て鑑と為さば、衣冠を正すべし。人を以て鑑と為さば、得失を明らむべし。」　後水尾院の歌に、

人を鑑として我が身を映してみない人は何なのか。世の中の人の鏡はいまもあるのに。

JC中先哲叢書_001.indd 25-26 2010/06/22 9:03:48



○天明八申年五月白川侯上京の時伊勢路にてある民家に
翹ひ給ひしに　その家の床に一軸あり　自在かぎに鍋をかけ
人々打より　何か烹飪のやうの画なりければ　候みづから染筆
して

この尻　目に三度焼けば天下平なり　焼ざる時は民くるし
む　焼ざればまじはり少し　みだりに焼ば家亡す　高屋の
御製もこの尻より出たり　貴賤貧富みなこの尻にあり
よきにによ　あしきにになよ　なべて世の　人の心は　自在鍋なり
と贊し給ふよし　飲食は人命のかゝる処といへども　喜色に耽り
驕奢に過れば　身を害し　家をやぶるを　警る　いと感深し

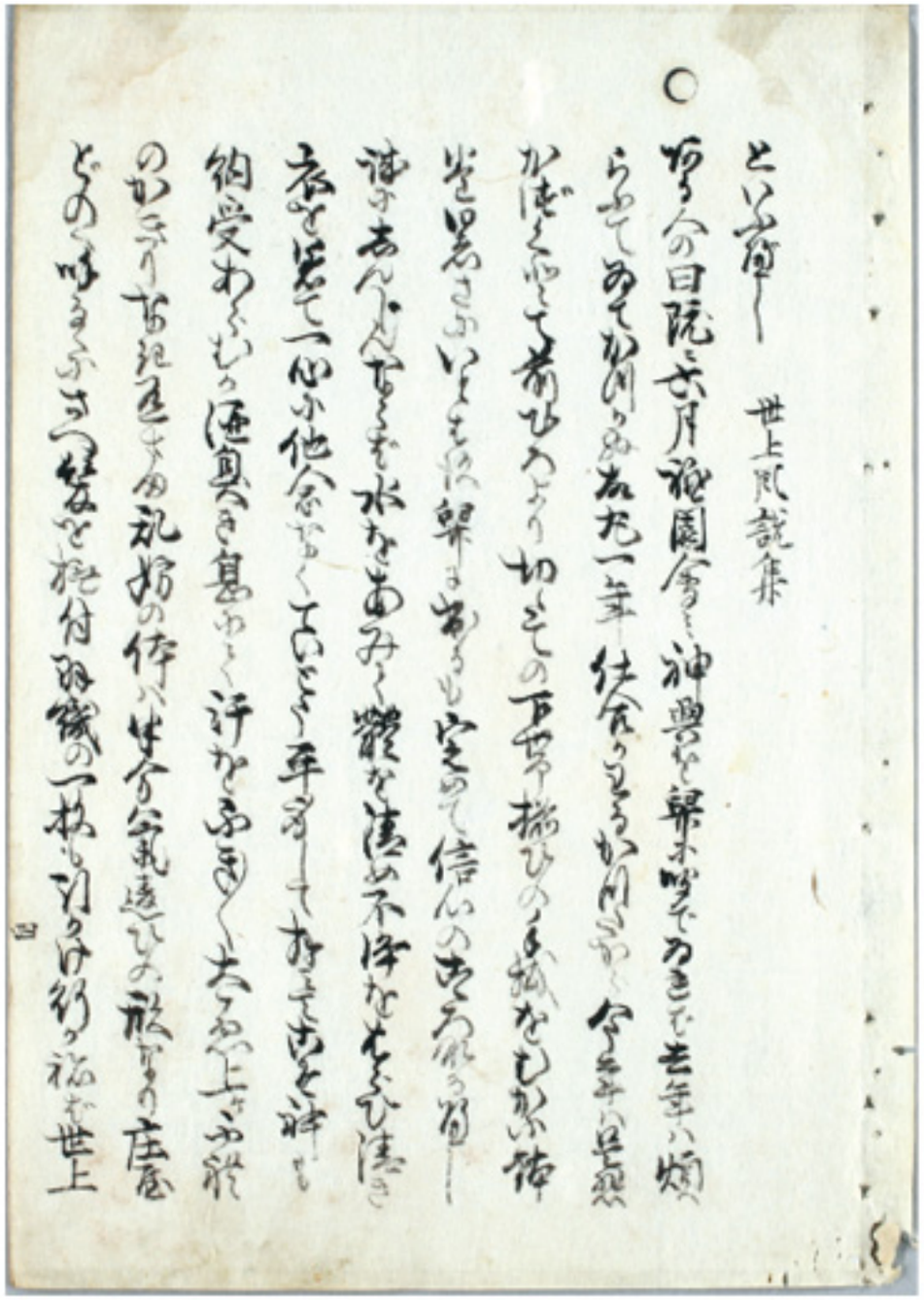
○天明八年申の年の五月、白川侯が上京した時、伊勢路のある民家で御休息なされたが、その家の床の間に一軸が掛けおいてあった。自在鉤に鍋をかけて、人々が集まって、何か煮炊きしているような絵であったので、白川侯は自身で筆をとり

この鍋の尻を毎日三度焼くと天下泰平である。焼かない時は民が苦しむ。焼かなければ交わりが少なく、むやみに焼くと家が滅びる。仁徳天皇の「高き屋に」の御製の和歌もこの尻から出たのだ。貴賤貧富はみなこの尻にあるのだ。

よいものに煮よ、悪いものに煮てはいけない。おしなべて世の人の心は自在鉤のようなものなのだ。

と賛を書きつけなさったということだ。飲食は人の命のかかることであるが、喜色にふけり驕奢が過ぎるとその身の害となり家を滅ぼすと戒めている。たいそう感銘深い

JC中央哲書集_001.indd 27-28 2010/04/22 9:03:50



といふべし　〈世上風説集〉

○ある人の曰　既に六月　祇園会の神輿を舁に　聞てゐれば　去年は煩らふてゐてかつがぬ故　丸一年仕合がわるかつたから　今年は是悲かつぐとて　前ひろより切たての下帯　揃ひの手拭をむかふ鉢巻　暑さにいとはず舁に出るも　定めて信心のこゝろなるべし　誠にしんじんならば　水をあみて体を清め　不浄をはらひ　清き衣を着て　一心に他念なく　ていとう平身して拝みてこそ　神も納受あらむか　酒臭き息にて　汗をふき〳〵　大ごゑ上げ　不礼のかぎりなき有さま　乱妨の体は　半分気違ひの形なり　庄屋どのへ呼るゝにさへ　髪を撫付　羽織の一枚も引かけ行かねば　世上

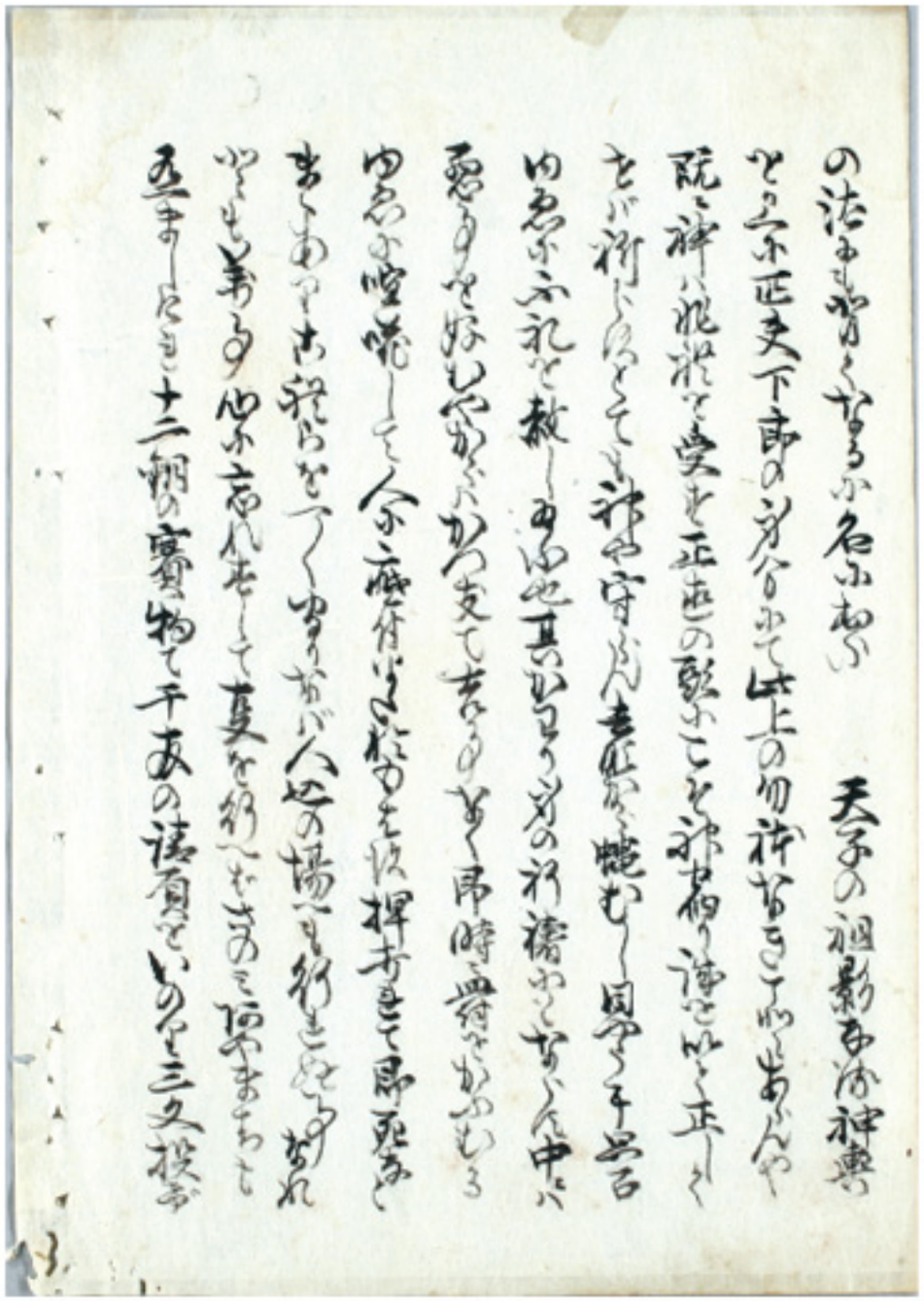
といふべき　〈世上風説集〉

○ある人の曰　既に六月　祇園会の神輿を舁に　聞てゐれば　去年は煩らふてゐてかつがぬ故　丸一年仕合がわるかつたから　今年は是悲かつぐとて　前ひろより切たての下帯　揃ひの手拭をむかふ鉢巻　暑さにいとはず舁に出るも　定めて信心のこゝろなるべし　誠にしんじんならば　水をあみて体を清め　不浄をはらひ　清き衣を着て　一心に他念なく　ていとう平身して拝みてこそ　神も納受あらむか　酒臭き息にて　汗をふき〳〵　大ごゑ上げ　不礼のかぎりなき有さま　乱妨の体は　半分気違ひの形なり　庄屋どのへ呼るゝにさへ　髪を撫付　羽織の一枚も引かけ行かねば　世上

というべきであろう。

○ある人の曰く、既に六月に祇園会の神輿を担いでいるので聞くと、去年は病気になって担がなかったので、今年は是非担ぐのだと言って、あらかじめ準備した新しい下帯、揃いの手拭を額に結んで、暑さを厭わず担ぎに出るのも、きっと信心の心によるものであろう。誠に信心の心があるなら、水を浴びて身体を清め、不浄を払い、清き衣を身につけて心の内に雑念はなく、平身低頭して拝んで、そうしてようやく神もその心を受け入れて下さるのではないか。酒臭い息で汗をふきながら大声を上げ、無礼限りない有様、乱暴の体は半ば正気を失ったような姿である。庄屋殿に呼ばれるのでさえも、髪を整え、羽織の一枚も着て行かなければ、世間

JG学先研叢書_001.indd 29-30 2010/04/22 9:03:52



の法にも背くなるに　名におふ　天子の祖影なる神奥
をかくに　匹夫下郎の身分にて　此上の勿体なきことあらんや
既に神は非礼を受ず　正直の頭にこそ神宿り　誠を以て正しく
せば　祈らずとても神や守らん　去ながら　蠅むし同やうに思召
ゆゑに　不礼を赦し給ふ也　其かわり身の祈祷にもならず　中には
悪事を好むやからは　かつぎて吉事なく　即時に罰をかふむる
ゆゑに　喧嘩して人に疵付　またおもはず押打れて即死など
まゝあり　これらを一〳〵守りなば　人込の場へも行れぬ事なれ
ども　万事心に忘れずして事を行へば　さのみあやまちも
有まじけれ　十二銅の賽物で千両の請負をいのり　三文投げ

の常識に背くものなのに、その名の通り天子の祖先を祀った神奥を担ぐのに、匹夫下郎の身分でこれ以上に恐れ多いことがあるだろうか。現に神は非礼を受け入れない。正直の頭にこそ神が宿るので、誠実をもって正しく行えば、祈らなくとも神は守ってくださるだろう。そうではあるが、蠅か虫と同じようにお思いになって無礼をお許しなさるのである。その代わり、身の祈祷にもならない。中に悪事を好む輩は担いでも吉事はなく、即時罰を受けるゆえ、喧嘩をして人を傷つけ、また思わず押し打たれて即死することもままある。もっとも、これらに一々従おうとしたら、人で混雑する所へも行けないことになるが、万事心の中で忘れずに事を行えば、それほどのあやまちもないであろう。十二銅の賽物で千両の報酬を祈り、三文の賽銭を投じて

心学先哲叢書_001.indd 31-32 2010/06/22 9:03:54

て百両の無尽の当りたきなど　欲の帳合一ふでの欲情なり

大星の言葉のごとく　青海苔買ふた礼に太々神楽打よりも

猶空なり　〈西馬善悪日記〉

○忠義仁孝礼智信は人輪の行道なれども　善悪に是を分

つときは　文字の五音はおなじけれども　其天地なること左の

ごとし

善　忠孝仁義礼智信

悪　偸乞盡妓零恥針

斯のごとく善悪とも移りやすく　手の裏をかえすばかりに

はやし　意を用ゆべきことにこそ　〈同上〉

百両の無尽講に当たりたいなどと、欲の損得計算は一筆で記した皮算用の欲心である。大星由良助の言葉のように、「青海苔を買った返礼に太々神楽を打つ」よりもさらに虚しい。

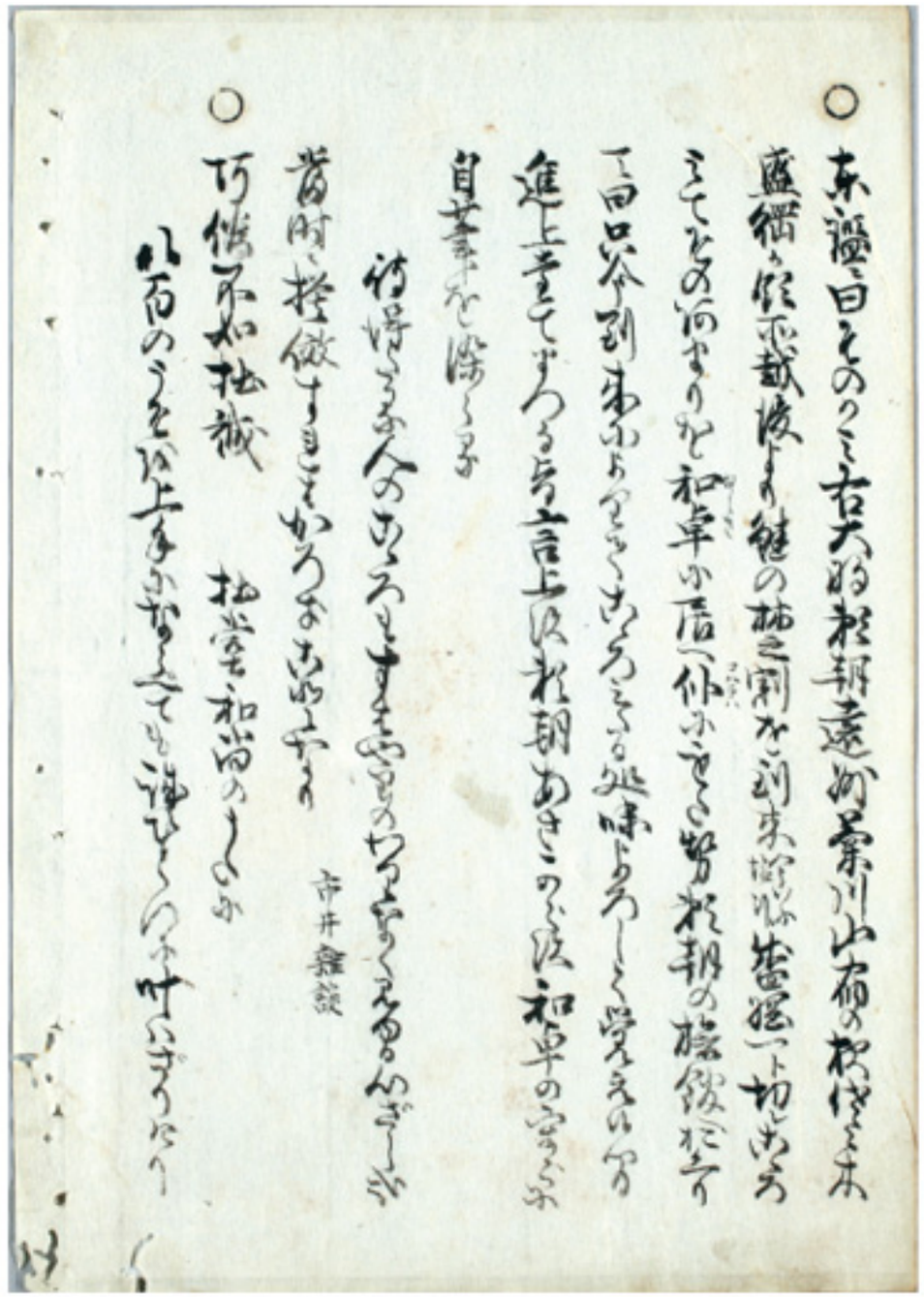
○忠義仁孝礼智信は人間の行くべき道であるけれど、善悪にこれを分けてみると、文字の五音は同じであるが、その違いは天地ほどであることは、次に記す通りである。

善　忠孝仁義礼智信

悪　偸乞盡妓零恥針

このように善悪とはどちらも移ろいやすく、手のひらを返すようにすぐに変わるものだ。心に止めておくべきことである。

心学先哲叢書_001.indd　33-34　2010/04/22　9:03:56



○『東鑑』に曰　そのかみ右大将頼朝　遠州菊川止宿の夜　佐々木盛綱が領所越後より鮭の楚割を到来に付盛綱一ト切レこゝろみて　そのあまりを和卓に居へ　伸にもたせ　頼朝の旅館へおくりて曰　只今到来によりてこゝろみたる処　味よろしく覚え候間　進上たてまつる旨言上候　頼朝あさからず　和卓のうらに自筆を染らる

待得たる　人のこゝろも　すはやりの　わりなく見ゆる　心ざし哉

当時に模倣すればかろきことなり　〈市井雑談〉

○巧偽不如拙誠　　拙堂和尚のうたに

八百の　うそを上手に　ならべても　誠ひとつに　叶はざりけり

○『吾妻鏡』に曰く、昔、右大将頼朝が遠州菊川に止宿した夜、佐々木盛綱の領所である越後から鮭の楚割が届き［今に言う塩引］、盛綱は一切れ試食してみて、その残りを折敷にのせ、使いに持たせて頼朝の旅宿へ送って伝言するには、「ただ今到着したため試食してみたところ、味がよいと思いましたので、進上奉ることをお伝えいたします。」頼朝は盛綱の志を浅からず思い、折敷の裏に自筆で書き付けた。

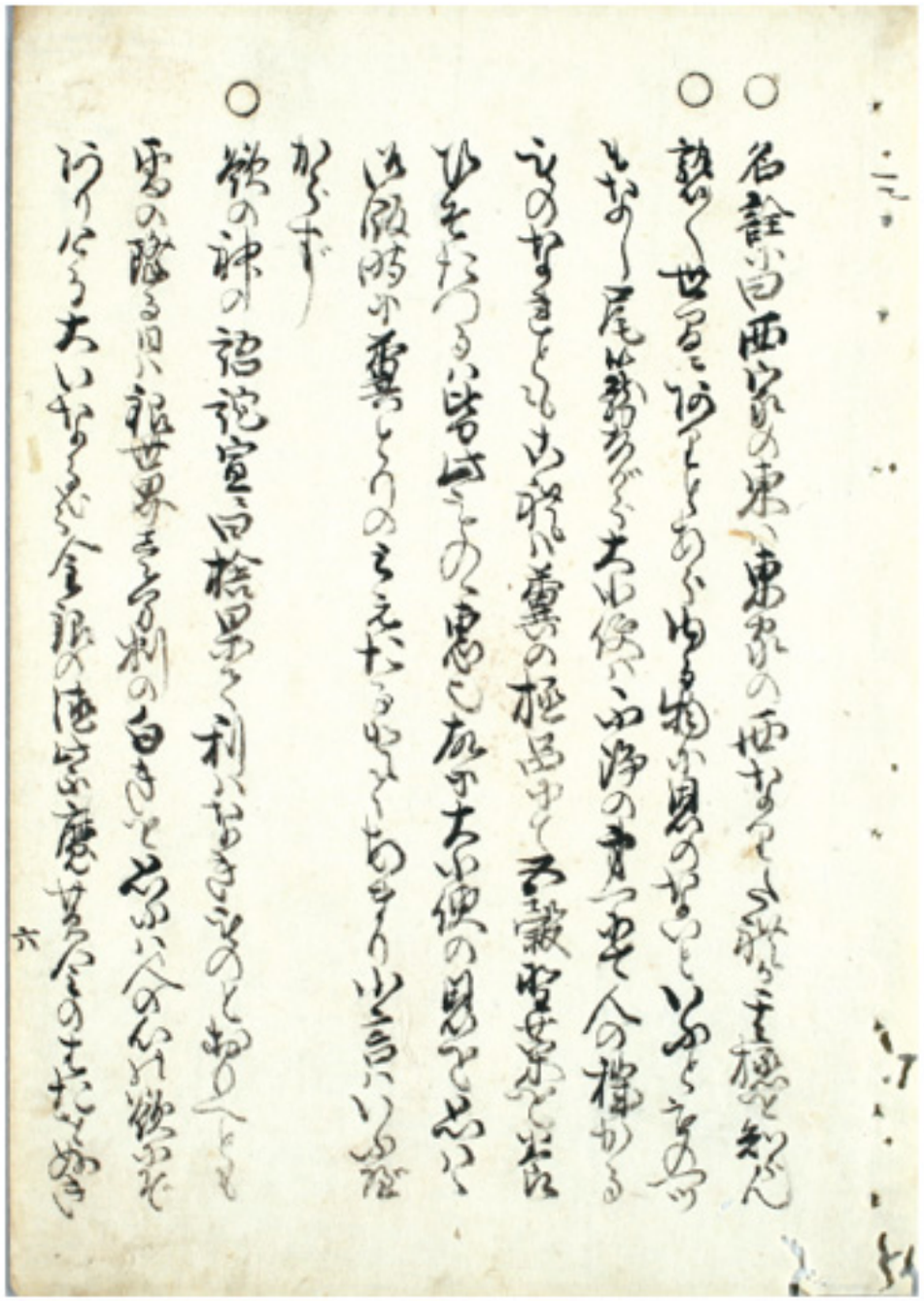
待ちえた人の心も楚割のように、わりなく殊勝に思える志であることよ。

今の時代に真似をすれば簡単なことである。

○巧偽は拙誠に如かず　拙堂和尚の歌に

八百の嘘を上手に並べたとしても、たった一つの誠に適わないものであるよ。

心学先哲叢書_001.indd 35-36 2013/04/22 9:03:58



○『名詮』に曰　西家の東は　東家の西なり　たれか其極を知らん

○熟々　世間にありとあらゆる物に　恩のないといふともの一つ

もなし　尾籠ながら　大小便は不浄の第一にて　人の穢がる

ものなれども　これは糞の極品にて　五穀野菜を養

ひそだつるは　皆此もの、恵也　故に大小便の恩を思はゞ

御飯時に糞とりのみえたるとて　あまり小言はいふべ

からず

○欲の神の詔託宣に曰　捨果て　利はなきものとおもへども

雪の降る日は銀世界　壱分判の白きを思ふは　人の心の欲にゞ

ありける　大いなる哉　金銀の徳　紫魔黄金のはだをぬぎ

○『名詮』に曰く、西家の東は東家の西である。誰がその極まる先を知るだろうか。

○よくよく思うに、世間のありとあらゆる物に恩のないというものは一つもない。尾籠な話だが、大小便は不浄の第一のもので、人々が汚がるものであるが、これは糞の極上品で五穀野菜がよく成長するのはすべてこの大小便の恩恵である。それゆえ、大小便の恩を思えば、食事時に便所の汲取が来たとしてもあまり文句を言ってはいけない。

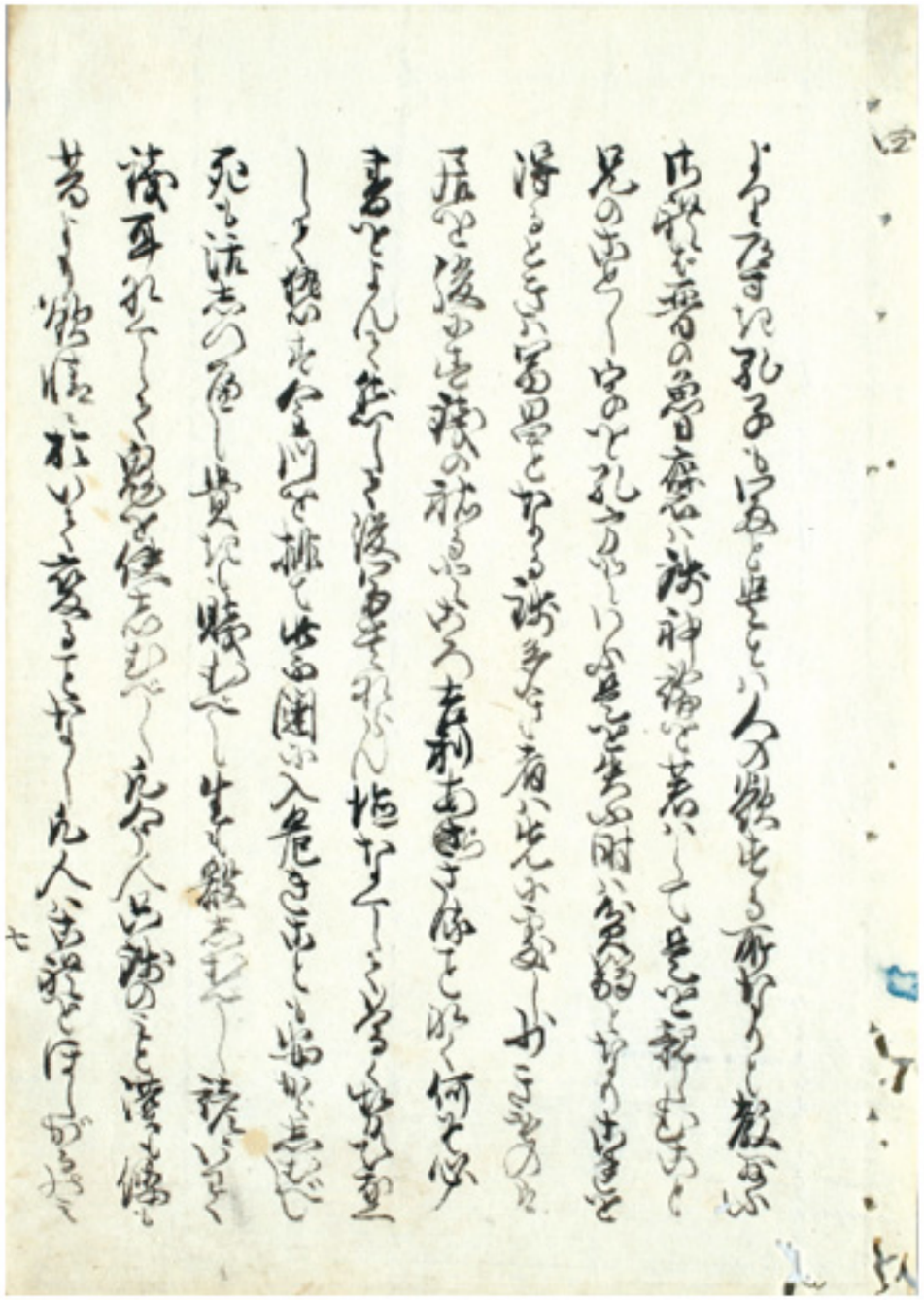
○欲の神のご託宣に曰く、それを捨ててしまって利得など考えないものと思っても、雪の降る日に銀世界を見て一分判の白さを思うのは、人の心の欲というものである。偉大なものであることよ、金銀の徳は。黄金は肌を見せて光り輝き、

JiO学先初原稿_001.indd 37-38 2010/04/22 9:04:00

て　阿弥陀も銭の光明をてらず　黄金のあるは至極ごく楽
地獄のさたも金次第　十王の勧進も喰がため　閻魔の抹香
なめたる顔も　是が為に解け　地蔵が顔も　三々九度撫ると
いへども　口をひらいで笑ふなるべし　照王の黄金台は賢
士の腹を穿　翼なくして敵せん飛　足なくして銭ごま
はしる　銀の猫も捨る日あり　金の鶏も失ふ時有　禍福得
失天命なれども　金が敵の世の中に　金がなければ　本蔵
も師直に濡の功もみえず　与市兵衛が横死　勘平が切腹も
みな金故のあやまち也　三千世界　欲のためには其身の亡ぶ
ることを忘る、情たへなれば　仏も福寿円満と説て　欲

阿弥陀如来も銭の光明を照らす。黄金のある者は至極極楽に暮らし、地獄の沙汰も金次第、冥土の十王の勧進も生活のため。閻魔の抹香をなめたような渋い顔も金を見れば和らぎ、地蔵の顔を三三九度撫でても、金があれば地蔵が口を開いて笑うだろう。照王の黄金台は賢士の腹に穴をあけ、翼なくして敵銭は飛び、足なくして銭ごまは走る。銀の猫も捨てる日があり、金の鶏を失う時もある。禍福得失は天の定めであるけれど、金が敵と言われる世の中で、金がなければ、加古川本蔵も高師直へ賄賂を贈る功は立てられず、与市兵衛の横死も勘平の腹切もみな金が原因の過ちである。三千世界で欲のためには自分の身が滅びることも忘れる状態なので、仏も福寿円満と説いて欲

JC/学先研叢書_001.indd 39-40 2013/04/22 9:04:02



より導き　孔子も富と貴とは人の欲する所なりと教へ給ふ
されば　晉の魯褒は『錢神論』を著はして　是を親しむこと
兄のごとし　字を孔方といふ　是を失ふ時は貧弱となり　これを
得るときは富昌となる　錢多き者は先に処し　少きものは
居を後にす　錢の祐るところ吉利あらざることなく　何ぞ必
書をよんで　然して後富貴ならん　徳なくして尊く　勢ひなく
して熱す　金門を排て柴闕に入　危きことも安からしむべし
死も活しつべし　貴きも賤むべし　生も殺しむべし　諺にいわく
錢耳なくして鬼を使しむべく　凡今人只錢のみと　漢も倭も
昔より欲情において変ることなし　凡人はこれをほしがるのみ

から導き、孔子も富と貴とは人の欲するところであるとお教えなさる。そうであるから、晉の魯褒は『錢神論』を書いて、「人が金に親しむこと兄に接するようだ。字を孔方という。金を失う時は貧しく弱くなり、金を得る時は富み栄える。錢の多い者は前に立ち、少ない者は後に居る。錢の助けで吉利がないことはなく、どうして必ず本を読んで、そうして後に富貴となるだろうか。錢さえあれば徳がなくても尊く、勢いがなくても熱す。金門を開いて宮中に入り、危険なことも安全にすることができる。死も生かすことができる。貴きものも卑しむことができる。生も殺させることができる。諺に、錢は耳なくして鬼を使役させるものだという。大体今の人はただ錢ばかりである」と。中国でも日本でも昔から欲心に関しては変わるところがない。凡人はこれを欲しがるばかり

JG学先研叢書_001.indd 41-42 2012/04/22 9:04:04

にして　惜がる事を思はねば　金銀の罰　忽ち其身にあたり

銭神に憎まれ　福神去て　貧鬼の使となること　覿面也

是欲神の語論にて「夫に付ても金の欲さに」といふ下の句　いかなる上の句にも付ぬといふことはあらず　爰を以て証とすべしと　理を非に枉ても財宝を貪り給ふ心迷は　守銭奴の産神にて　常に欲獣を愛し給ふと　云伝へしとなん　〈善悪迷所〉

○身のほどを知らず　年々不如意になるやうな事をするなら学文も十郎ばんもいらざるべし　何の為に習ひたるや　末のつまる様にしてさい　つまらぬこと多し　いわんや始よりつまらぬ事をしては　勘定はあわぬ筈也　只たらぬの沙汰にはあらず　入道と

で、惜しむことをしないので、金銀の罰がすぐにその身に当たり、銭神に憎まれ、福神は去り、貧鬼に使役されること、目の当たりである。これは欲の神のご託宣であり、「それにつけても金の欲しさに」という下の句はどんな上の句にも付かないということはない。これをもって証拠とすべきだと、理を非に曲げても、財宝を貪りなさる心のありようは守銭奴の産神で、常に欲の獣を愛しなさると言い伝えているとのことだ。

○身の程を知らず、年々不如意になるようなことをするならば、学問も算盤もいらないだろう。何のために習っているのか、最後が合うようにしてさえも合わないことが多い。ましてや始めから合わないことをしては、勘定が合わないはずである。ただ足らないということではない。入る道と

JG学先哲叢集_001.indd 43-44 2010/04/22 9:04:07

出る道と千万里の違ひなり　名馬にても追付がたし

いる道と　出るあしとを　ふみあわせ　其程〳〵に　世を渡るべし

是人間一生の大事なれば　しれ切たることながら　慎んで意味深長を観味しべし

世のなかを　なんのへちまと　思ひども　ぶらりとしては　くらされもせず

○いとけなき時　老母より伝りし古歌に

よ所にのみ　見てやゝみなむ　葛城の　高間の山の　峯のしら雲

此歌のこゝろを観得せるに哉　幼よりして歎羨の心うすし

また亡友吉田学生の友人の歌とて

かくてしも　栖めばすみれの　はなにさへ　うさをわする、　蓬生の宿

出る道と千万里も違っている。これでは名馬でも追いつくのは難しい。

入る道と出る足とを踏み合わせて、それぞれ身の程に合った世渡りをすべきであるよ。

これは人間の一生における大事であるから、分かり切ったことではあるが、慎んでその深い意味を味わうべきだ。

世の中をただのへちまと思っても、ぶらりとしていては生活もできない。

○幼い時、老母から伝わった古歌に

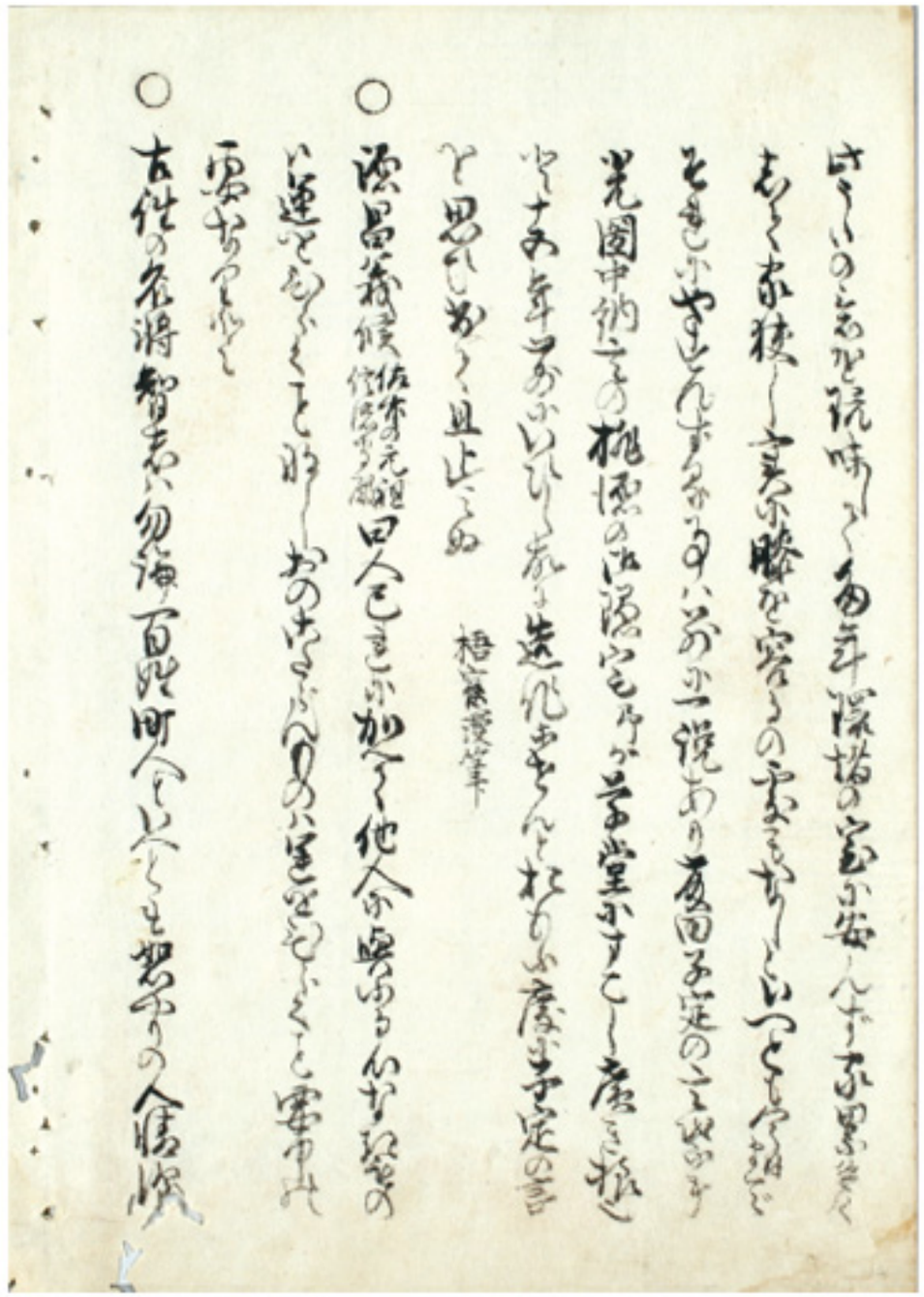
よそながらに見てそれだけにしておこうか、葛城の高間の山の峰の白雲は。

この歌の心を深く理解しているからだろうか、幼い時から羨む気持ちがうすい。

また亡き友吉田学生の友人の歌で、

このように住めばそれなり住むことができ、菫の花にさえ憂さを忘れる蓬生の宿であるよ。

JC中允哲叢集_001.indd 45-46 2010/06/22 9:04:09



○源昌義侯佐竹の元祖信濃守殿曰人己れに加へて他人に与ふる心なきものは運を開くことなし　おのこたらんものは　運をひらくこと　要中の要なりと

○古往の名将智者は勿論　百姓町人といへども　慈やりの人情深

此うたの意を玩味して　多年環堵の室に安んず　家累多くして家狭し　実に膝を容るの処もなしといへども　今日まで

それにやすんずる事は　別に一説あり　藤田子定の言葉に

光圀中納言の桃源の御隠宅　予が学堂にすこし広き様也

と　十五年前にいひし故に　造作等せんとおもふ度に　子定の言

を思ひ出て　且止みぬ　〈梧窓漫筆〉

○源呂義侯曰　人己れに加へて他人に与ふる心なきもの

は　運をひらくことなし　おのこたらんものは　運をひらくこと　要中の

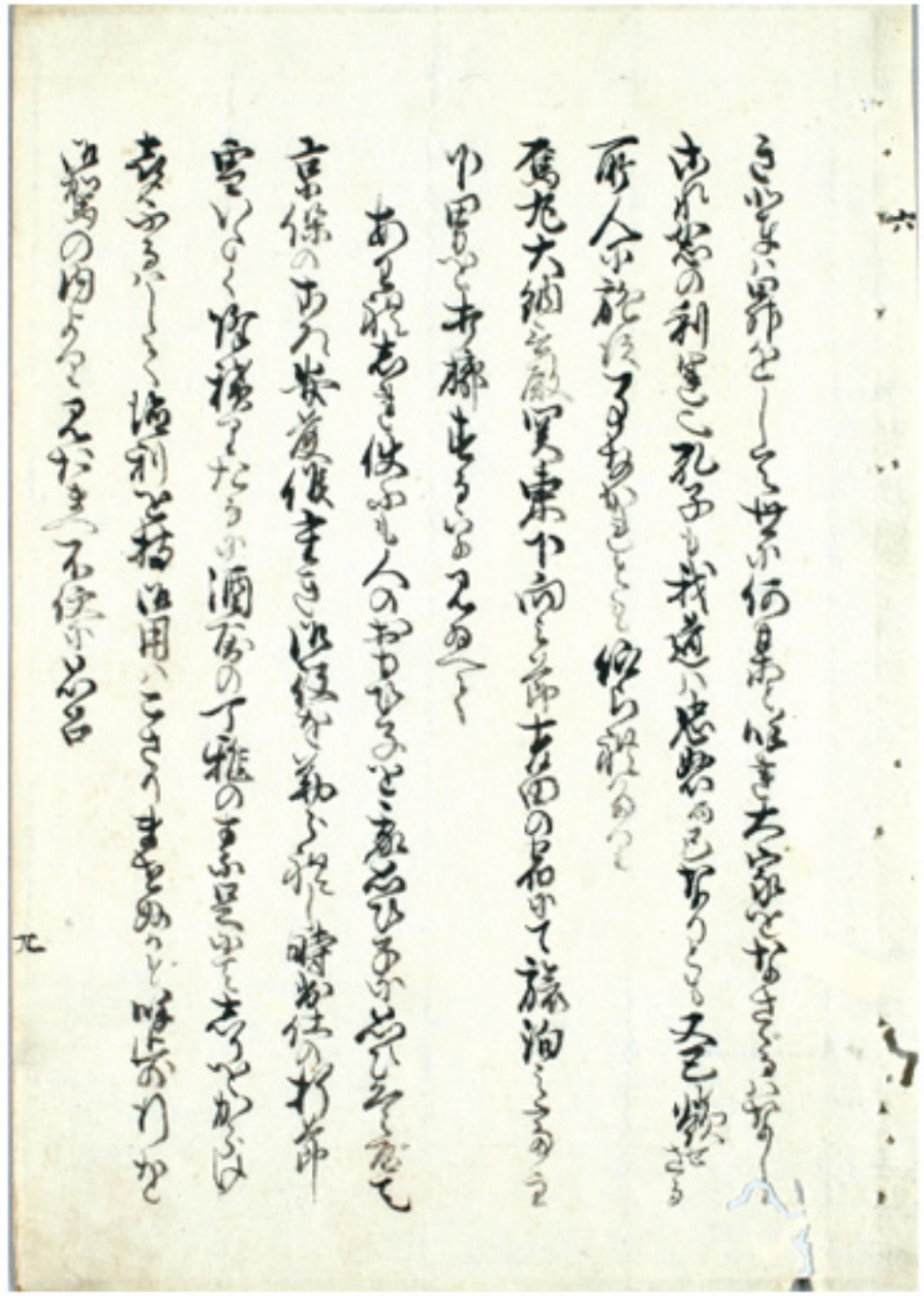
要なりと

この歌の意味をよく味わって、長年狭い部屋に満足している。係累は多く家は狭い。まことに「膝をおさめる所もない」と言うけれど、今日までそれに安んじていることは、別に一つの経緯がある。藤田子定の言葉で、「徳川光圀の桃源の御隠宅は自分の学堂より少し広い程度である」と十五年前に言ったために、改築などしようと思う度に、この子定の言葉を思い出して止めている。

○源呂義侯（佐竹の元祖／信濃守殿）曰く、人は己だけでなく他人にも、与える心のないものは運を開くことがない。男子たるものは運を開くことが要中の要である。

○いにしえの名将智者はもちろん、百姓町人であっても思いやりの情が深

JC学先哲叢集_001.indd 47-48 2010/06/22 9:04:11



き輩は昇進して　世に何某と呼ばれ　大家をなさざるはなし

これ恕の利運也　孔子も我道は忠恕のみなりとも　又己れ欲せざる

所人に施す事なかれとも　仰られたり

烏丸大納言殿関東下向の節　吉田の宿にて　旅泊の亭主

下男を打擲するを見給へて

あわれしれ　使ふも人の　おもひ子を　我思ひ子に　思ひくらべて

享保のころ　安藤侯重き御役を勤られし時　出仕の折節

雪いたく降積りたるに　酒屋の丁稚の　素足にてしりをからげ

声ふるはして徳利を持　御用はこざりませぬかと呼歩行を

御駕の内より見たまへ　不便に思召

いものは昇進して、世間で誰それと呼ばれ、大家にならない者はない。これは思いやりの利運である。孔子も、我が道は忠と恕のみなりとも、自分が望まないことを人にしてはいけないとも仰っている。

烏丸大納言殿は関東へ東下の折に、吉田の宿で亭主が下男を打ちすえるのをご覧になって、

哀れを知れ。使用人も誰かが大事に思う人の子であるのだから、その子を大事な我が子に思いなぞらえてみて。

享保の頃、安藤侯が重いお役目を勤められた時、出仕の際に雪がひどく降り積もっていたところ、酒屋の丁稚が裸足で尻からげをして声を震わせながら徳利を持って、「ご用はございませんか」と言い歩くのを、お駕籠の内からご覧になり気の毒にお思いになられて、

JC中先哲叢書_001.indd 49-50 2010/04/22 9:04:13

雪の日や　あれも人の子　樽ひろひ

まだ延享のころ　浅草御蔵前に西島といへる俳諧師の　雪の夜丁稚を友に出行をみて

我子なら　供にはつれず　よるの雪

と女房のよみたるとぞ　是情人情一対にして　同日の談なるべし

○東照宮様御遺訓に　主従ははりこの虎のごとし　主人の頭が うごかざれば　家来の尾はうごかぬものなりと　仰られたり

○古きふみに　ある人朝鮮の役に軍用乏しくして　黒田如水軒に金子五拾両を借り　帰陣の後　返金せむと黒田の宅へ越しけるに　折から到来とて　鯛壱枚を家来持出　披露しける

雪の日や。寒さの中樽拾いをするあの子も誰かの大切な子であるよ。

まだ延享の頃、浅草蔵前にいた西島という俳諧師が雪の夜に丁稚を供として出かけるのを見て、

我が子ならば供には連れないよ。こんな夜の雪の中を。

と女房が読んだということだ。これらは皆、人情が一対であって、同じ趣意の話であろう。

○東照宮様の御遺訓に、「主従は張り子の虎のようなものだ。主人の頭が動かなければ、家来の尾は動かないものだ」と仰られた。

○古い書に、ある人が朝鮮の役に軍用が乏しく黒田如水軒に金五十両を借り、帰陣した後に返金しようと黒田の屋敷へ行ったところ、ちょうど到来したといって鯛一枚を家来が持って出て接露した。

JQ学先哲叢書_001.indd 51-52 2012/04/22 9:04:15